

研究動向

アジアの自然と文化

「アジアの自然と文化」のプロジェクトは2006年4月から2008年3月までの2年間にわたる研究である。総合文化研究所の方針のひとつとして「アジアに関わる研究」があるが、その意味で本研究は内容的に研究所で従来行われてきた「アジアの生活と文化」を継続し、更にグローバルという視点によって、普遍と個別との問題を付加したものである。2006年度、2007年度共に研究分担者は、橋本典子（芸術学科）「荘子の自然観とその影響」、渡部徳子（家政学科）「グローバリゼーションとアジアの自然環境」、八耳俊文（教養学科）「アジアの科学と技術」の3名である。研究分担者は、それぞれ以下の点を視野に入れながら各自の研究を進めている。

- 1) グローバリゼーションという世界の動向の中で、アジア全体及び個別的な自然に対する態度決定を我々は迫られている。地球温暖化が問題視されるようになって、アジアの環境政策、特に中国の環境政策は地球全体の有様を左右するまでになっている。
- 2) “津波”後のインド洋周辺地域、また大地震後のインドネシアの海、焼き畑農業等の自然と文化的伝統に対して現実に解決すべき問題はアジアの自然と文化を考える際に我々に多くの示唆を与えてくれた。
- 3) 具体的問題を論ずるためには、必要なデータを収集しなくてはならない。
- 4) アジアの問題はそこに生活する人々との関わりの中でしか論じられない。
- 5) それらの問題は政治的解決を迫られる。

橋本は、中国古典の荘子の自然観を中心に歴史研究をしながら、急激に発達した現代中国の都市化現象またコンピュータ技術がもたらす精

神文化への影響を考察している。現在荘子の考えを哲学的に再評価すべく資料を読んでいる。2006年度、世界的に環境問題は注目され、Video や DVD 等の新しい企画によって世界の様々な状況が知らされた。更に2007年にはゴア氏がノーベル平和賞を受け、世界では様々な実践的プロジェクトが立ち上げられている。そのような状況の中で、渡部は、アジアの自然と地球全体の環境の具体的データに基づいて、化学者の視点から現在急速に発展しているアジア諸国と世界との関わりに具体的提案をしている。八耳は、1931年から1945年まで上海のフランス租界の南西に設置された上海自然科学研究所の化学科に焦点をあて所員と活動についての研究をすすめた。同研究所は日本の対支文化事業のひとつとして計画され、日中合同の東方文化事業上海委員会が運営したものである。出版物のほかアジア歴史資料センターのウェブサイトから文書を収集し、現在、これらを分析中である。八耳の方法論は歴史研究でもあるが着実な実証的研究である。

2006年度から2007年度9月現在まで計4回、講師を招きアジアの自然と文化についての研究会を開催した。第1回は中條利一郎東京工業大学名誉教授に「論語から見える現代中国」という題で、現在行われている中国の大学と東京工業大学との研究交流、特に自然科学、基礎科学の研究成果及び研究者の相互交換の実際についてうかがった。第2回は順天堂大学医史学研究室の吉田和裕氏に「東アジアにおける『東医宝鑑』』という題で、韓国での東洋医学の勉強の際に使用される『東医宝鑑』の項目、その構造、そしてこの書物を通しての韓国での東洋医

学の学習状況などについて報告を御願ひした。第3回は猪俣道也東京農業大学教授に「地質学者との交流から見た北朝鮮」という題で、中国東北部及び朝鮮半島の地質、鉱物資源についての情報交換の現状について、北朝鮮の地質学者との交流の実績を通した説明を御願ひした。第4回は江幡武東北大学名誉教授に「吉林省植林事業から見える中国事情」という題で、先生のグループが長年実践してこられた、肥沃でなく冬には凍土になる吉林省での植林事業を通して、現在の地球環境の状況をうかがった。それによると、従来凍土となっていた大地の下に本来あるべき水が涸れており、砂漠化現象が都市部にまで迫っているとのことであった。現在の砂漠化の状態では土地の肥沃化どころか人間が住むことすら出来なくなりつつあるということであった。

研究プロジェクトでは今後、2～3回の講演会を予定しており、更に新たな問題を論じていく予定である。2008年2月には五野井隆史聖トマス大学教授に「ヴェトナムにおけるキリスト教」を、その他、自然科学の研究者を御呼びして、グローバルな視点から特に中国の環境問題について講演を御願ひしている。

ところで、中国の人々にとって「自然」とはいかなるものであったか？福永光司によれば、「中国人にとって自己と世界の根源にあるものは、“道”すなわち天地大自然の造化の理法、もしくはこの世界を貫く宇宙的な秩序であった。」更に、「この根源的な真理すなわち“道”は、あらゆる形あるものを生み出す生成の原理としては“天下の母”（『老子』）と呼ばれ、人間を含む一切万物がそこから生じ、またそこに帰ってゆく究極的な実在としては“天地の根”（『老子』）と呼ばれ、自然の世界と人間の世界を貫く秩序と法則の根源としては“天地の理”（『莊子』）と呼ばれる。また、その存在が形なく声なく人間の感覚知覚的な把握を絶している

という点では“無”（『老子』）と呼ばれ、そのはたらしが刻々に流動変化して一瞬も止まることがないという点では“変化の流れ”（『莊子』）と呼ばれ、人間のような目的意識や作為のわざとらしさをもたぬという点では“無為自然”（『老子』）と呼ばれる。」（『中国の芸術哲学』）したがって己の根源に“道”（自然）をみとめ、形をもつすべての存在の在り方の中にも“道”を悟ることで、世界全体の普遍の真理を見つけることになる。そしてやがては“道”の根源である無の中に帰っていく存在として人間は自己を有限の存在として諦観する。この視点は今や忘れられたのか？相良亨は論文『「おのずから」としての自然』の中で、西洋の自然が「本質を始源とする運動変化」としての生成が中心的問題であるのに対して、「日本の「おのずから」としての自然が、本性・本質、あるいは秩序の意をもたず、ただ「おのずからなる」こと自体を内容としていること」に注目している。これは、アジアの「自然」についての考えとして興味深い。またクラウド・マイヤー＝アービヒは『自然との和解への道』（*Wege zum Frieden mit der Natur*, 1984）（山内廣隆訳）の中で自然を共世界（Mitwelt）と見る。そこで「人間は人間社会においてあるだけで真に人間でありうるのではなく、自然的共同体のなかで動物や植物、風や水、天や地とともにあってこそ真に人間でありうるということが、本質的に人間の規定のなかにある。」と人間を規定し直して我々は「全体としての自然」を考える時に来ている、と主張する。

我々は、グローバリゼーションの中において、そこに我々の座を持つものとして、アジアの環境を実践的に考えるべきであろう。

研究分担者はそれぞれの分担題に即して書物を買ひ整え、『研究所年報』に成果を発表すべく研究報告の準備をしている。

（橋本典子）